

シネマ日記



No. 77

○月×日 パリで静かに心豊かに暮らす、共に音楽家の老夫婦。今は引退したものの、この晩も愛弟子のコンサートに出かけ、ふたりは十二分に満足して帰途に着く。「愛、アムール」(仏、ミヒヤエル・ハネケ監督)は、愛に充ちて勞わり合う、晩年はこうありたいと絵のような幸せなシーンから始まる。しかし、アパートに帰ると、異変が。妻は脳梗塞に倒れ、入院したが、半身不随となり車椅子生活となった。老老介護の厳しい現実が始まるが、夫婦にはこれまでと変わらない穏やかな日々が過ぎていく。だが、そんな時期は長く続かない。妻に認知症の症状が現れ、寝たきりに。

さらに、食物も拒むようになり、夫は思わず手を上げてしまうことも。愛の絆はどこへ、やがて破局が……。 「共白髪まで添い遂げる」というが、綺麗ごとにはいかない。身につまされる辛い物語だ。が、老いと死の残酷さに正面から向き合う姿は感動的でさえある。本年度のアカデミー外国語映画賞を受賞した。

○月×日 第二次世界大戦後、軍隊から帰還したものの、アルコール依存を断ち切れず、野獣のような日々を過ごしている。そんな男(ホアキン・フェニックス)が新興宗教の教祖、マスター(フィリップ・シモア・ホフマン)に出会い、信者となる。「ザ・マスター」(ポール・トーマス・アンダーソン監督)では、この二人が反発しながらも引かれ合い、父子のようにときに恋人のように濃密な愛憎関係を展開する。危なげで、いかがわしい二人が抱えた心の闇、孤独の影、不安、虚無感の深さ……。男とは(女ではない)、かくも不可解の存在というかのように。

○月×日 「ハープ&ドロシー ふたりからの贈り物」(佐々木芽生監督)は、郵便局員と図書館司書のハープとドロシー夫妻が、現代アートのコレクションを全米50の美術館に50点ずつ寄贈する旅のドキュメンタリー。前作「アートの森の小さな巨人」では、ふたりの給料からコツコツと、好きな絵画やオブジェのアーートを買い集め、そのコレクションを無償で、ワシントン・ナショナル・ギャラリー(国立美術館)に寄贈するまでの実話が描かれた。その後、4000点にまで増えたアートの国立美術館でも収蔵しきれなくなり、新たに全米に寄贈することになった。その過程を本作は描き出す。「ただアートの好きだから」との理由で買い集めた夫妻は、生涯に一度も作品を売って利益を得ることはなかった。その清廉な生き方は感動ものだ。寄贈の旅はまた、夫のハープが89歳で人生を完結した旅立ちでもあった。夫妻のコレクションは、現代アートのうちでも「ミニマル・アート」と呼ばれる技巧に

走らないシンブルな形や色で表現する作品が多いが、期せずしてこれらアートの入門にもなって楽しめた。

○月×日 「舟を編む」(石井裕也監督)は三浦しるんの同名小説の映画化。タイトルは辞書を編集するという意味だが、辞書の魅力に取りつかれた人たちの十数年がかりの編纂の物語。悩み、喜び、苦勞の日々……。筆者も出版社にいただけに共感を抱いた。「ひまわりと子犬の7日間」(平松恵美子監督)は、山田洋次監督の下で長年、助監督・脚本に従事した平松の初メガホン作品。野犬の殺処分が仕事の保健所職員(堺雅人)の物語だが、動物を可愛がったものの、手に余ると安易に捨ててしまうことの多い世の中、小中学生にお勧めの映画だ。動物愛護を考えるきっかけになればと思う。

○月×日 「汚れなき祈り」(ルーマニア、クリスティアン・ムンジウ監督)は、05年に、この国の修道院で実際にあった悪魔祓いの事件を題材に、宗教が持つ独善性や不寛容さがもたらす悲劇を描く。(内藤 哲)